

第4章 考察

第1節 扇状地扇央部における打製石斧出土の意味

打製石斧は縄文時代の石器組成においてもっとも一般的な石器のひとつである。縄文時代前期の南関東地方に出現し、中期にかけて関東・中部地方を中心に盛行した後に衰退するが、弥生時代に至っても存続する。また、西日本には縄文時代中期末にあらわれ、後期後半になって普及することが指摘されている〔藤尾：2003〕。

本遺跡では、縄文遺物のなかで打製石斧が大部分を占め、そのほかの石器類は1点も出土していない。つまり、石器組成としては打製石斧のみで構成されるわけであり、それとともに土器量が集落遺跡と比較して極端に少ないことが今回調査区の最大の特徴ということができる。このことから本遺跡の縄文時代の実態を解明するためのもっとも重要なファクターとして考えられる打製石斧に焦点をあて考察をすすめたい。

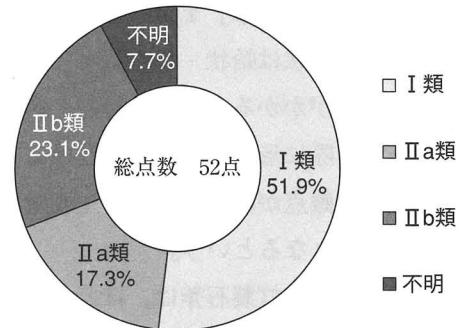
(1) 打製石斧の類型と構成

年代 打製石斧は欠損品も含めて全部で52本出土している。すべて5層（遺物包含層）からの出土であり、遺構に伴うものはない。同じ5層（遺物包含層）から共伴して出土した土器は、上山田・天神山式、串田新I・II式、気屋式、八日市新保式が主体となっていることから縄文時代中期中葉から後期前葉、そして後期後葉の範囲に含まれるものと考えられるが、個々の打製石斧の時期比定をすることは難しい。北陸地方では、打製石斧が中期中葉から後葉にかけて増加する傾向がある〔山本：1985〕ことから、本遺跡資料も年代的に矛盾しない。

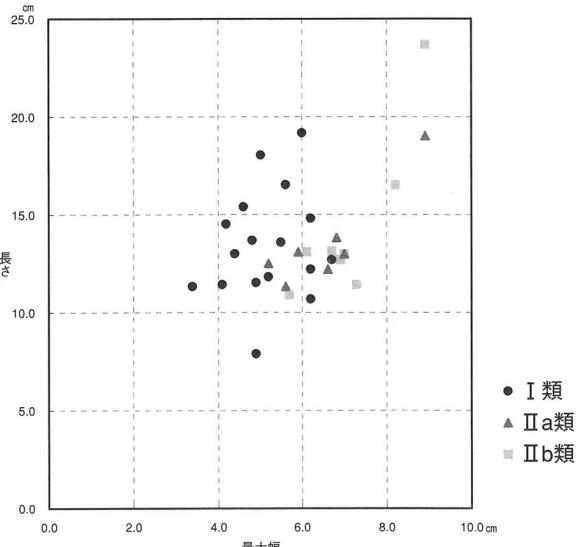
形態分類

形態によって、伝統的な分類法である短冊形（I類）と撥形（II類）に大別した。分銅形やその他のものは認められない。I類は、両側縁がほぼ平行な短冊形である。II類は、側縁部が刃部に向かって直線的に開くものの（IIa類）と基部に近いところでくびれ（抉り）をもつもの（IIb類）に細別することとした。構成は、I類が27点（51.9%）、II類が21点（40.4%）{うちIIa類9点（17.3%）、IIb類12点（23.1%）}、欠損しているため不明のものが4点（7.7%）である。数値的にはI類がII類を若干上回っており、II類についてIIb類がIIa類よりやや多い。

打製石斧の形態分類構成



打製石斧法量分布図



製作技法 打製石斧の製作工程は、〈工程①：大型扁平円礫から背面に自然礫面の残る橢円形横長剥片を剥離する〉→〈工程②：この大型剥片を素材とし、打点側および先端側を中心に整形剥離を加えて大まかな打製石斧の形態を作り出す〉→〈工程③：着柄部のくびれ部等の側縁部や刃部にさらに細かな剥離や敲打を加えて完成する〉というのが一般的である〔山本：1996〕。本遺跡出土の打製石斧は、そのほとんどが原材に衝撃を与えて大形剥片を取り出し、側部から打ち割って大体の形を整えている。一面には自然礫面をそのまま利用しており、なだらかな反りをもつのが特徴である。基部側の自然礫面は刃部に比べて屈曲しており、原材の側面を意識して剥離したものと思われる。刃部は丁寧に工程③を行い鋭く作り出しているもの（Fig.29-42、Fig.30-48・53～55、Fig.31-59～61、Fig.32-63・64・67・68など）が大半を占めるが、なかには素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするもの（Fig.29-44・47、Fig.31-57・62、Fig.32-69）もある。

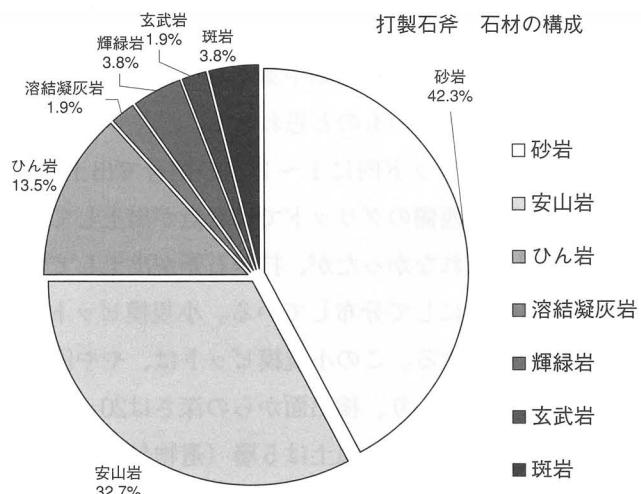
石川県野々市町の粟田遺跡では、打製石斧とともにその母岩類にも注目し製作方法のパターンを導き出している。岡本恭一氏は、母岩に残された剥離痕や加撃痕そして剥片、裂片との接合資料や出土状況から打製石斧の製作技法について三つの技法が存在することを推定している〔岡本：1991〕。第一の技法は、「選択した礫の縁辺の全周ないしは半周ちかくに幾度も打撃を加え、半截あるいは一部を剥離する方法」であり、両面に全く自然礫面を残さないものや中落ちの板状の剥片が得られることがあるため両面加工、または全面加工する必要が生じる。第二の技法は、「礫の側縁に対してほぼ平行方向の加撃」を行うものであり、第三の技法は「礫の側縁に対してほぼ垂直方向の加撃」を行うものである。その結果、剥離される剥片は加撃の力が均等に伝わると、剥片の形状は蛤状・鶴嘴状となる。第一の技法の場合、大型剥片を得ることは難しく、二次加工に手間がかかる。これに対し、第二、第三の技法は、剥片形状が蛤状・鶴嘴状となるため二次加工する際に形態的な制約を受けること、そしてうまく力が伝わらないと大きな剥片がえられないという難点があるものの、主剥離面と自然礫面の交わる側片は加撃点から離れるにつれて薄く鋭いものとなるという。

今回出土した打製石斧は、ほとんどが岡本氏のいう第二、第三の技法によって製作されたものと考えられる。素材の鋭い縁辺を何ら加工せず、そのまま刃部とするもの（Fig.29-44・47、Fig.31-57・62、Fig.32-69）のように工程③が省かれているのは、こうした技法によって製作されたことを示すものである。また、66（Fig.32）は唯一両面が加工されており、自然礫面が残っていない。これは第一の技法により製作されたものと考えられる。

また、側縁部を観察すると敲打痕がみられるものが多く、工程③の結果によるものと思われる。I類には、基部から刃部にかけて敲打痕がみられる。これは製作工程上、肉厚となる部分を削ぎ落とし整形するために生じたものと考えられる。そしてII類については、IIa類の側縁部に敲打痕が顕著にみられる。I類のように基部から刃部にかけてのものもあるが、くびれ部に集中的に敲打を施している。I・II類ともに敲打する部分は若干となるものの、いずれも工程①・②によって生じた側縁部の刃を潰し、着柄し易くするために敲打されたものであるとみることができる。

使用石材 原材は扁平円礫もしくは大形の円礫を使用していると考えられる。石材は、砂岩22点(42.3%)、安山岩(角閃石安山岩・変朽安山岩含む)17点(32.7%)、ひん岩7点(13.5%)、溶結凝灰岩1点(1.9%)、輝緑岩2点(3.8%)、玄武岩1点(1.9%)、斑岩2点(3.8%)で構成される。石材は多様であり、これは打製石斧の特徴ということができ、石材選択の幅が広いことを表している[山本:1989]。決して硬度が高くない砂岩がもっとも多いのは、製品の使用に際しそれほど強度を必要としなかったことの表れとみることが可能である。

また、すべての石材は川原などで採取可能なものであると思われ、扇状地という地理的環境を考えるとその入手は容易だったものと考えられる。「石材運搬に関わるコストやエネルギー、効率性などを考慮すれば打製石斧の大半が集落外で製作されていたとするのが、妥当」[川口:1997]という考え方を援用すると、本遺跡周辺で石材を入手し、打製石斧を製作し現地で使用していた可能性が高い。



(2) 出土状況から推定される打製石斧の用途

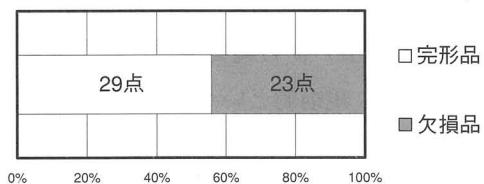
使用痕 使用痕については、ほとんどの刃部が残っている製品や破損品にみられる。刃部先端が磨り減って丸くなっているものや、使用により刃部が欠けたものがある。明瞭な擦痕や条線痕などはみとめられない。

完形品(遺存率90%以上)と欠損品の比率は、右表のとおりである。ここで注目したいのは、完形品が半数以上を占めているということである。遺存率90%以上であれば、廃棄される必要はなく打製石斧として充分にその機能を有し使用に耐えうるものと思われる。これらの打製石斧はある程度使用したのち、目的を果たしたためにそこに捨てられたとみることができ、言い換えれば“使い捨ての道具”であったことができる。欠損品については、非常に損傷し易い用途に用いられたとも、使用頻度が高く消耗が激しかったとも言い切れない。

側縁部については、着柄するための敲打がなされているが、着柄による摩滅がみられる。I類については、刃部から着柄したと考えられる部分にかけて摩滅しているものがある(Fig.29-42, Fig.30-50)。側縁部の摩滅は使用によるものであり、着柄したと考えられる部分には幅1~1.5cm程度の摩滅がみられ、着柄により磨り減ったものと思われる。

また、64(Fig.32)は、刃部と基部の稜線に沿って帯状に黒褐色の小塊が付着しており、使用的際に付着したものか土壤中の成分が集積して付着したものか判然としない。

完形品と欠損品の比率



出土状況 この遺跡の調査面積と打製石斧の出土数を単純に計算すると、約80m²に1点の割合で出土していることになる。ただし調査区全体にわたって平均的に出土しているわけではなく、A-2区にある南北に走る浅い埋没谷から東側の範囲で大半が出土している。数個の打製石斧がまとった状態で出土するということではなく、散発的に5層（遺物包含層）から出土しており、遺構に伴うものはなかった。5層（遺物包含層）のなかでも地山である6層・7層に近いところ、漸移層が発達している部分からの出土である。5層（遺物包含層）下部の土壌で放射性炭素年代測定を行ったところ、BP 3330±100という年代が得られている（第3章第6節、p67）ことから、年代的に縄文時代中期中葉から後期前葉、後期後葉の範囲に帰属すると考えている打製石斧の年代観と大差ないものと思われる。

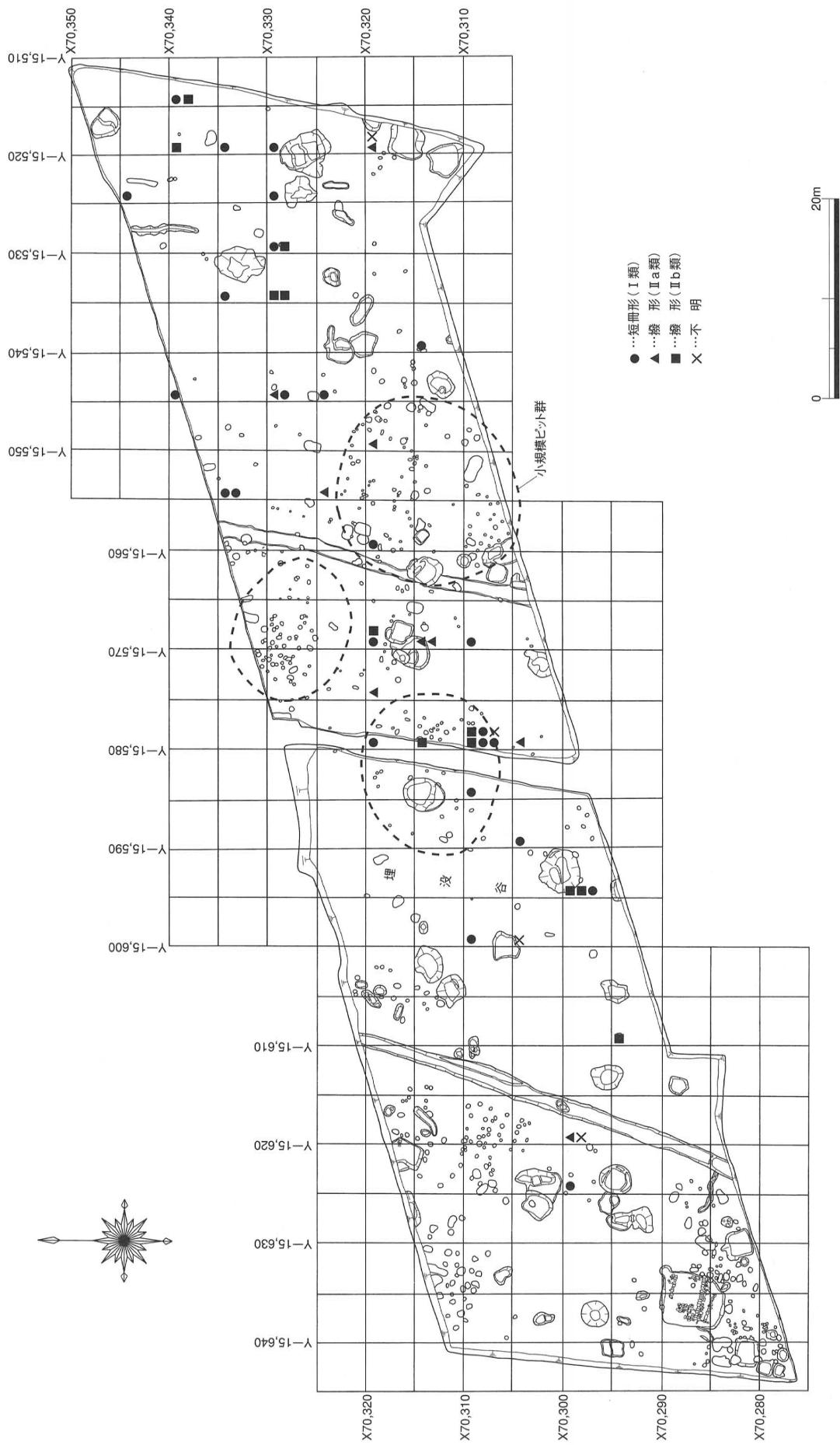
5mグリッド内に1～2点の割合で出土していることが多いが、もっとも多く出土しているA-3区西側のグリッドでは6点が出土している。下層遺構面では明確に縄文時代に属する遺構は認められなかったが、打製石斧が出土している地点は、小規模ピットが密集している範囲を避けるようにして分布している。小規模ピット群は、調査区のほぼ中央、SD90を挟んで南北に無数に存在する。この小規模ピットは、やや円錐形状を呈し底部に向かって先細りしているものがほとんどであり、検出面からの深さは20～40cm程度のものである。柱穴などのように柱根痕跡などは認められず、埋土は5層（遺物包含層）に近い黒褐色土に地山シルトが粒状に混ざっているような状況であったため、構築物を構成するものではなく何のために掘られたものか判然としない。しかし、この小規模ピットは点在するというより一定の範囲で集中して存在する傾向があり、そこにこの遺構を読み解く手がかりがあるようと思われる。遺物が伴わないと時期を比定することも難しい。ただ、この遺構は、地山上面において検出したが、おそらく5層（遺物包含層）中とくに下層付近から掘り込まれたものであると思われ、5層（遺物包含層）の年代（第3章第6節、p67）から縄文時代に属するものである可能性は充分に考えられる。現地調査での印象としては、規則的というよりも不規則に掘り込まれている状況から、植物質食料などを採集するために掘られたものではないかという感触をえたが、それを立証することは現時点では難しいといわざるをえない。

打製石斧の用途 一般的に打製石斧は、縄文時代中期から爆発的に出土例が増加する遺物であり、すでに磨製石斧が普及していることから木材の伐採や加工の道具というよりもむしろ土掘具であると推定されている。また、鍬としての用途が考えられており、縄文時代中期農耕論の有力な根拠のひとつとなっているが、立証することは難しく、棒の先に装着して掘棒やシャベルのように使用され根茎類・球根類などの植物質食料の採集に使用されていたとも想定されている。縄文時代中期には遺跡から出土する石器総数の大半が打製石斧で占められ、生産活動の上でもっとも重要な石器として位置付けられるという〔鈴木：1983〕。

今回I類（短冊形）としたものは、刃部の使用痕が刃に対して直角についていることが多いため、突き棒や掘り棒として土中深くまでまっすぐ突き立てて使用されていたと考えられる〔今村：1989〕。本遺跡出土品についても刃部の摩滅とともに、刃部から着柄部にかけて側縁部に摩滅がみられることから、同様の使用方法を推定することが可能である。

小規模ピット群がその形状や規模等から、何かを得るために掘られた結果、形成された遺構であるとするならば、その周辺に土掘具や耕起具と推定される打製石斧が分布するということに意

Fig.36 打製石斧出土分布図 (Scale=1/600)



味があるように思われる。打製石斧の出土地点周辺には、地山であるシルトや黒色の5層（遺物包含層）のように比較的柔らかい土が堆積する環境にある。完形品の比率が高いことや石材に砂岩を使用していることは比較的強度を必要としなかったことを意味している。まさにI類は、この場所で穴を掘るのに最適の道具であるといえる。渡辺誠氏は、打製石斧を根茎類（ワラビ・クズ・カタクリ・ヒガンバナ）の採集具とみなしており〔渡辺：1975〕、今村啓爾氏は、ジネンジョを採集するための道具としている〔今村：1988〕。I類は、自然科学的な確証は得られないが、植物質食料を採集するための道具とするのがもっとも説得力をもつ。

次に、II類（撥形）についてみてみる。縄文時代後期に短冊形に遅れて撥形・分銅形・有肩形が東日本に現れ、後期後半に西日本に出現する〔藤尾：2003〕。藤尾慎一郎氏は、この3つの形式は、畑作に関連する遺物としている。撥形・分銅形は、「浅く幅広く起耘する鋤的な使用法への変化に対応した形態」ととらえており、その根拠として①遺跡立地から穀物栽培が想定されること、そして②短冊形に比べて大形で刃幅が広いので、短冊形とはことなる機能を有していたことが推定されることなどを挙げている。

本遺跡出土のIIb類としたものには、くびれ部に着装痕と考えられる摩滅がみられ、I類のように側縁部の摩滅痕はあまり顕著でない。また、形態的にくびれ部を作り出しているのは、I類とは着柄方法がことなることによるものと思われる。また、I類の体部はほとんどが扁平であるのに対し、IIb類には体部がやや厚みをもつ製品・69（Fig.32）がある。I類は土中に深く突き刺すことが目的と考えられることから、体部に直線的に結束して柄を着装していたと思われる。II類は、I類と同様の着柄方法も考えられるが、62（Fig.31）・69（Fig.32）などの大形品は、直接手で握るかもしくはL字の柄を体部に結束し鋤のように着柄していたことが想定できる。確かにII類は、I類に比べて刃部幅が広い場合が多いが、小型品の場合I類と同様の着柄方法も充分に考えられるため、機能がことなるとはいきれない。むしろ、II類の中でも小型のものは、穴を掘ったり土中に突き刺す機能を有しているものと思われる。I類との形態的相違は、着柄を強固なものにするための工夫だったのではないか。ただし、大形品に限っては他の機能を推定したほうが良いよう思う。しかし、短絡的に鋤としての機能を当てはめることはできず、慎重に考慮する必要がある。

今回、5層（遺物包含層）を含むプラント・オパール分析を実施した（第3章第5節, p.58）。外山氏によれば、5層（遺物包含層）である黒ボク土の形成過程について、「クマザサ属をはじめとする笹原となり、その後シルト質細砂層が堆積して安定した土地条件に変わり、微高地から後背低地にかけての緩傾斜地にススキやチガヤなどのウシクサ類が繁茂する草原となる」と考察されている。5層からはプラント・オパールは全く検出されなかったので稲作の可能性は低いが、腐植土であるため畑作を行うことは可能であると考えられる。ただし、自然科学的に畑作を立証することは難しいため、打製石斧との関係を明らかとすることはできない。

（3）打製石斧が主体的に出土する遺跡

今回の調査では、縄文土器が極少量の出土にとどまり、かえって打製石斧が高割合で出土するという特徴的な出土傾向が認められた。また、遺構に関しては、住居跡など居住施設は全く検出されず、縄文時代に属する可能性がある小規模なピットが群集するという状況も本遺跡の特徴で

番号	遺跡名	所在地	立地	時期	打斧数	石器組成
1	下山新遺跡	朝日町下山新	扇状地扇央部	中期前葉～後期前葉	10以上	打斧・磨斧・砥石・石錐・石錐
2	不動堂遺跡	朝日町不動堂～横水	扇状地下位段丘	中期前葉・中葉	10以上	打斧・磨斧・すり石・砥石・石皿
3	馬場山D遺跡	朝日町境	小丘陵	中期前葉	44	打斧・磨斧・砥石(石皿)・擦り切り石器・石錐・擦石・凹石・石錐・敲石・台石・楔形石器・部分磨斧・大型削器・環状石器・剥片・玉類・原石・球状耳飾
4	馬場山F遺跡	朝日町境	小丘陵	中期前葉	22	打斧・磨斧・石斧未製品・砾石・凹石・擦石・敲石・石錐・尖頭器・石錐・石核・剥片・ヒスイ原石
5	馬場山H遺跡	朝日町境	小丘陵	中期前葉～後期後葉	12	打斧・磨斧・石錐・砥石・敲石・台石・石核・石錐・剥片・玉未成品
6	浦山寺藏遺跡	宇奈月町浦山	扇状地扇頂部	中期前葉～後期初頭	16	打斧・磨斧・砥石・石皿・擦石・石棒・擦切具・石冠・玉類・石匙・石錐・凹石・不定形石器・剥片など
7	早月上野遺跡	魚津市上野・麻生・吉野	台地	中期前葉～晚期後葉	85	打斧・磨斧・石錐・石錐・石錐類・石匙・玉類・磨石類・削器
8	石垣遺跡	魚津市石垣	河岸段丘	中期中葉～後晩期	219	打斧・磨斧・砥石(石皿)・凹石・磨石・石錐・石錐・石匙・石棒(石刀合七)・玉類
9	山下II遺跡	魚津市	台地	中期後半～後期後半	7	打斧・磨斧・石錐・削器
10	吉野遺跡	魚津市	台地	中期中葉～後期中葉	47	打斧・磨斧・石錐・石皿
11	湯神子A遺跡	上市町湯神子	河岸段丘	中期前葉	10	打斧・磨斧・擦石・凹石・フレーク
12	岩崎野遺跡	立山町岩崎寺	扇状地扇頂部	中期後半～後期初頭	200以上	打斧・磨斧・砥石・擦石・凹石・石錐・石錐・石皿・石棒・石棒状石器
13	古屋敷II遺跡	立山町芦齋寺	河岸段丘	前期後葉～晚期後葉	13	打斧・磨斧・砥石・凹石・石核・剥片・磨製石刀
14	吉峰遺跡	立山町吉峰野間・下田	高位河岸段丘	前期後葉～中期初頭	10以上	打斧・磨斧・砥石・擦石・凹石・敲石・叩石・石錐・石錐・石匙・石皿・抹状耳飾・玉類・垂飾品・石ランプ・削器・楔形石器・ひょうたん形石器・二次加工有削片・黒曜石・鉄石英剥片・石核
15	花切遺跡	大山町本宮	高位河岸段丘	中期中葉～後葉	40	打斧・磨斧・硬玉製磨斧・砥石・凹石・擦石・擦切具・叩石・磨石・石錐・石錐・石皿・石棒・有孔円板状石器・ヒスイ原石・剥片など
16	東黒牧上野遺跡	大山町東黒牧上野	高位河岸段丘	中期中葉・後葉	77	打斧・磨斧・砥石・凹石・敲石・磨石・石錐・石皿・小玉・石墨状石製品など
17	北代遺跡	富山市北代	台地	早期・中期前葉～晚期前半	10以上	打斧・磨斧・凹石・石錐・石錐・石皿・小玉・石墨状石製品など
18	古沢遺跡	富山市古沢	旧扇状地扇頂部	中期前葉～後・晚期	10以上	打斧・磨斧・砥石・凹石・敲石・擦石・石錐・石錐・石皿・擦切具・石刀・石棒・玉類・未成品など
19	布尻遺跡	大沢野町布尻	扇状地扇頂部河岸段丘	中期後葉～後期前葉	10以上	打斧・磨斧・砥石・凹石・擦石・石錐・石錐・石錐・石皿・石匙・石刀・石棒・石ランプ・垂飾品・独創石状石器等
20	長山遺跡	八尾町深谷	独立丘陵	前期後葉・中期前葉・中期末葉・後期後半	10以上	打斧・磨斧・砥石・凹石・磨石・石錐・石錐・石匙・石皿・黑曜石剥片など
21	妙川寺遺跡	八尾町妙川寺	扇状地河岸段丘	中期後葉	12	打斧・磨斧・砥石・凹石・敲石・石錐・擦器・剥片など
22	鏡坂I遺跡	婦中町外輪野	河岸段丘	中期中葉～後半	19	打斧・磨斧・砥石・凹石・敲石・磨石・石錐・石錐・石皿・石棒・石核・石棒・不明磨製石器・スクレイバー・剥片・使用痕有削片・加工痕有削片・扁平標・剥剝様
23	串田新遺跡	大門町串田新	独立丘陵	中期後半	25	打斧・磨斧・砥石・擦石・凹(印8)石・石錐・楔形石器・剥片など
24	勝木原遺跡	高岡市勝木原	舌状台地	中期・後晩期	51	打斧・磨斧・砥石・凹石・敲石・磨石・石錐・石錐・刃器(擦切具)・石刀・石冠・石棒・角柱状石器
25	糞島遺跡	福岡町糞島	扇状地扇央部	晚期中葉～後葉	14	打斧・叩石
26	久泉遺跡	砺波市祖泉・久泉	扇状地扇央部	中期中葉～後期前葉・後期後葉	52	打斧
27	松原遺跡	庄川町松原	扇状地扇頂部	中期前葉	14	打斧・磨斧・磨石・石錐
28	埴生上野遺跡	小矢部市埴生	舌状台地	中期後葉	10以上	打斧・磨斧・磨石・敲石・石錐・石錐・石皿・石製垂飾品など
29	こもむら遺跡	平村下梨	河岸段丘	前期末葉・中期中葉・後期初頭・中葉	10以上	打斧・磨斧・砥石・擦石・叩石・石錐・石錐・石匙・石皿・石棒・石核・有孔大珠・有孔環玉など
30	東中江遺跡	平村東中江	河岸段丘台地	中期前葉～後・晚期	195	打斧・磨斧・砥石・擦石・叩石・凹石・石錐・石錐・石皿・石棒・玉類・硬玉製大珠・御物石器・ビエス・エスキュー
31	五百歩遺跡	福野町	台地	後期初頭	27	打斧・石錐・石匙・石製容器・磨斧・磨石・凹石・石錐・敲石・紙石・石刀・石冠
32	梅原胡摩堂遺跡	福光町梅原・宗守	低位河岸段丘	後期～晚期	104	打斧・磨斧・磨石・凹石・叩石・石皿・石棒・石錐未成品
33	梅原安丸II遺跡	福光町梅原	低位河岸段丘	後期後半	27	打斧・磨斧・凹石・敲石・石錐・石錐・石皿・石冠
34	梅原安丸IV遺跡	福光町梅原	低位河岸段丘	後期～晚期	47	打斧・磨斧・凹石
35	梅原加賀坊遺跡	福光町梅原	微高地	後期後葉～晚期中葉	40	打斧・石錐・削器・剥片

Tab.8 県内の打製石斧出土遺跡

あるといえる。大規模な縄文集落にみられるような住居跡や貯蔵穴などの豊富な遺構群、そして多量の土器類や多様な石器組成などとは全く対照的である。

本遺跡の打製石斧の在り方を検討する材料として、県内の打製石斧出土遺跡を表に示した（Tab.8）。打製石斧が出土している遺跡は多数あるため、ここでは打製石斧が10点以上出土しているものに限定して取り上げた。

本遺跡のように打製石斧が石器組成のなかで主体を占めるとともに土器の出土量が少ないという遺跡は、県内では小矢部川流域の扇状地上や早月川流域の洪積台地上、石川県では手取川流域の扇状地で確認されている〔麻柄：2003、山本：1990〕。

早月川流域の洪積台地（上中島台地）では、吉野遺跡、山下Ⅱ遺跡などが確認されている。上中島台地では、該期の拠点集落である早月上野遺跡が存在しており、吉野遺跡の南東約1km、山下Ⅱ遺跡の南東約1.2kmに位置する。

吉野遺跡では、中期中葉から後期までの土器が10数点出土しているのに対し、石器は打製石斧47点、磨製石斧5点、石皿1点、石錐1点が出土している〔魚津市教委：2000〕。いずれも遺物包含層からの出土であり、住居などの遺構は確認されていない。

山下Ⅱ遺跡では、中期から晩期までの縄文土器とともに打製石斧を主体とする石器が出土している。打製石斧は7点と少ないが、土器出土量に比べると多い。山下Ⅱ遺跡では、住居などの居住施設は確認されていないが、時期不明の柱穴状ピットが多数検出されている。この柱穴状ピットの断面図が報告書に掲載されていないことから推定の域をでないが、これらピット群も久泉遺跡と同様に植物質食料採集のために掘られたものである可能性があるのならば、遺跡立地の点ではことなるもののきわめて近い種類の遺跡であるといえる。

また、小矢部川流域に存在する蓑島遺跡は、晩期中葉から後葉の土器とともに打製石斧14点と叩石が出土している。遺構は土坑と土器片が出土した自然流路だけであり、居住施設の存在はない。蓑島遺跡の西約5kmには小矢部市桜町遺跡が存在する。

手取川扇状地は、白山大汝峰に源を発する手取川により形成されている。この扇状地上に打製石斧が主体的に出土する遺跡が確認されている。野々市町粟田遺跡、近松遺跡、清金アガトウ遺跡などが該当するという〔岡本：1991〕。

総括すると、打製石斧が主体的に出土する遺跡には、次のような特徴がみられる。

- ①打製石斧が他の石器を卓越しており、石器組成が多様でない。
- ②土器出土量が相対的に少なく、小破片が多い。
- ③時期は縄文時代中期から晩期に含まれる。
- ④堅穴住居などの居住施設が伴わない。
- ⑤沖積扇状地・洪積台地上に立地し、周辺に拠点的な集落が存在する。

（4）久泉遺跡を形成した集団

市域の縄文遺跡は、庄川右岸の芹谷野段丘以東に大半が存在する。福山大堤遺跡では草創期と考えられる半月形石槍が確認されているが、前期後葉から中期にかけて遺跡数が増加する傾向にある。県下でも著名な縄文遺跡である巖照寺遺跡は、堅穴住居や多量の土器が出土しており、周辺では拠点的な性格をもつ遺跡と考えられるが、時期は中期前葉に属するため、久泉遺跡に先行

大別	略別	北陸の土器編年	遺跡名	久泉	福山大堤	巖照寺	高沢島I	高沢島II	宮森新北島I	上和田	頬成	増山	東保石坂	徳万	孫子ワバラ
			m	55	120	79	54	53	78	70	85	50	38	62	350
晚期	後葉	柴山出村・大境V													
		下野II・長竹 下野I													
	中葉	(中屋III) 中屋II 中屋I													
		(御経塚III) 御経塚II 御経塚I・勝木原													
後期	後葉	八日市新保II 八日市新保I (井口III) 井口II													
		酒見・井口I (+)													
	前葉	気屋II 気屋I 前田・岩崎野													
		(+) 串田新II 串田新I(大杉谷)													
中期	中葉	(古府II) 古府 上山田・天神山II 上山田・天神山I													
		新崎III 新崎II 新崎I 新保II 新保I													
	前葉	朝日下層 福浦上層													
		覗ヶ森II 覗ヶ森I 福浦下層 朝日C													
前期	中葉	佐渡・極楽寺													
		〔常世〕 桜峠													
早期	後半														
草創期															

Tab.9 市域の縄文遺跡消長表

する。久泉遺跡に時期的に近い遺跡としては、東保石坂遺跡、徳万遺跡が挙げられる。これらの遺跡は、いずれも芹谷野段丘縁辺部に立地しており、久泉遺跡からは3～4km程の範囲にあり、歩いて1時間程の距離である。

久泉遺跡は、庄川扇状地扇央部で初めて認識された縄文遺跡であるといつても過言ではない。これまでこの扇状地上は、庄川の氾濫によって縄文遺跡はおろか、古代や中世にいたっても非常に遺跡分布の希薄な地帯であるとされてきた。では、なぜ久泉遺跡はこのような扇状地上に存在するのであろうか。ひとつは、久泉遺跡は何本も南北に走る河道に挟まれている場所であるものの、周辺より若干高い微高地という地形状況にあることである。地山層の直上に漸移層が発達し、黒色有機質層が厚く堆積していることは安定的な地形であることを示している。ただし、試掘調査では黒色有機質層の間に幾層か洪水層と思しき薄いシルト層が確認できたことから、住まいを構えるには決して好条件とはいえない。今回の調査規模と打製石斧の出土量からすれば、居住施設がわずかに存在していてもおかしくないが、それも検出できなかつたことから久泉遺跡を通常の集落として扱うことは適当でないと思われる。土器が少量の出土にとどまり打製石斧が主体的に出土するということは、素直に解釈すれば“打製石斧を使用もしくは廃棄するための場所”であったというほかない。

麻柄一志氏は、打製石斧出土の遺跡について「砺波平野では中期から晩期まで継続する拠点集落はなく、ある程度の期間が続く大規模集落が場所を変えて移動し、植物質食料獲得の場所が扇状地内に広がっている可能性がある」と指摘している（麻柄：2003）。これまで筆者が試掘調査や分布調査を行ってきた経験上、庄川扇状地扇央部に大規模集落が存在するということは考え難い。扇頂部には庄川町松原遺跡があり、先端部の湧水帶には大規模集落とまではいえずともある程度の規模をもつ遺跡の存在が知られる。おそらく麻柄氏のいう大規模集落は扇状地のなかでも扇頂部や扇端部、台地縁辺部などに存在するのではないだろうか。久泉遺跡はそうした集落からはかなりの距離があることから、本遺跡を形成した集団は、東保石坂遺跡や徳万遺跡が存在する芹谷野段丘以東もしくは縁辺部に拠点的な集落を営んでいたと考えるほうが妥当であるように思えてならない。古環境を考慮しても、生業の面からは扇央部よりも山間部に近いほうが動物性タンパク質や堅果類の採集に適していると考えられる。西田正規氏は、「資源を集落に運搬する」効果的な対応策として、「必要な資源をできる限り集落から近い範囲で入手すること」を挙げており、「より狭い環境の集約的利用」が定住者のめざすところであるとしている〔西田：1989〕。庄川扇状地西域では芹谷野段丘縁辺部から山間部にかけてある程度の期間をもった集落が営まれ、季節によって扇状地上に移動し植物質食料の採集に勤しんでいた、という漠然としたパターンが現時点では想定可能である。

久泉遺跡のような打製石斧が主体的に出土する遺跡は出土遺物量が割合として低いため、認識されること自体が難しい。しかし、精度の高い試掘調査を行うことにより、こうした遺跡はさらに発見されるものと確信している。今後、資料増加を待って久泉遺跡の性格を見極めていきたい。

（野原）